

宗教の多元化と多元主義

Overview

- 導入的事例——日本の新宗教
- 宗教の多元化と宗教多元主義
- 「宗教の神学」「宗教間対話」における類型論
 - 排他主義、包括主義、多元主義
- 多元主義モデルの問題点
- 包括主義および排他主義の再考
- まとめ

新宗教について

宗教ブームの変遷

第1次宗教ブーム	江戸時代末期(1800年代~) 仏教や神道、地域の習俗的信仰などの教義や儀礼をもとに取っ組み合いの庶民信仰(民間宗教)を背景に、その影響を受けた天理教(1838年)、金光教(1859年)などが創設される	黒住教、1814年
第2次宗教ブーム	明治時代末期(1890年代~) 大本(1892年)、霊友会(1923年)、ひとのみち(原フエタツリ(フュー) (PL) 教団、1930年)といった新宗教が生まれるが、国家の統制や干渉を受ける	
第3次宗教ブーム	戦後(1945年前後) 敗戦後、当局の監視を逃れて新宗教が次々、生長の家(1930年)、世界救世教(1935年)、立正佼成会(1938年)など、また、天理教大神宮教(1946年)、パーフェクトリバイバー(PL)教団(1946年)、創生学会(1948年)がこの頃誕生	
第4次宗教ブーム	高度経済成長期(1970年代~) 『真・争』の解決を期し立正佼成会や創生学会などが勢力を伸ばす。高度成長により豊かな社会が実現し始めると、霊現象や奇蹟など新しい教人を惹く新宗教も出現。世界真光文明教団(1963年)、阿含宗(1978年)、宗教真光(1978年)、ジーエルエー(原ジーエルエー総合本部、1970年)などが誕生	
精神世界ブーム	1980年代~ 若者層のオカルト志向、精神世界ブームなどを背景に、幸福の科学(1986年)、オウム真理教(1989年)などが誕生。また近年では、テレビ番組がきっかけとなり『20のチュアル』が拡大	週刊『ダイヤモンド』(特集「宗教とカネ」) 2010年11月13日号より

20大新宗教の系譜



新宗教の特徴

- 神道・仏教・民俗宗教などに起源を持ちつつ、分派し教団を形成。
- 開祖(教祖)のカリスマ性が大きな役割を果たす。
- シンクレティズム(宗教混交)を積極的に活用。
 - 例:大本では「万教同根」を唱える。
- 1980年代以降の新宗教では、科学との親和性を強調。

宗教の多元化と宗教多元主義

- 世俗化および宗教の**多元化 (religious diversity)**
- 一神教と多神教の関係(前回テーマ → **一と多の関係**)
 - 異なる宗教同士をどのように関係づけるのか
- 方法論としての**宗教多元主義 (religious pluralism)**

「宗教の神学」「宗教間対話」 における類型論

- 排他主義 (exclusivism) : 救いは自宗教においてのみ
- 包括主義 (inclusivism) : 他の宗教にも救済の可能性
- 多元主義 (pluralism) : すべての宗教は基本的に対等

排他主義

- 伝統的なカトリックの宗教理解——「教会の外に救いなし」
- プロテスタントの保守派
- 特 徴
 - キリスト教と他宗教との間の「断絶」を強調
 - 聖書の権威を強調——逐語靈感説
 - 「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことはできない。」(ヨハネ14:6)
 - キリスト論を強調——K・バルトへの言及

包括主義

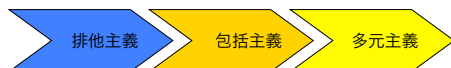
- 第二バチカン公会議以降のカトリック
 - 宣言「我らの時代に」(Nostra Aetate)で他の宗教の真理性を否定しないことを確認
- 1960年代以降の世界教会協議会(WCC)における他宗教理解
- 特 徴
 - 救済は他の宗教においても可能(神の恵みの普遍性)
 - キリスト教と他宗教との間には包括的な上下関係があると考えられる。

多元主義

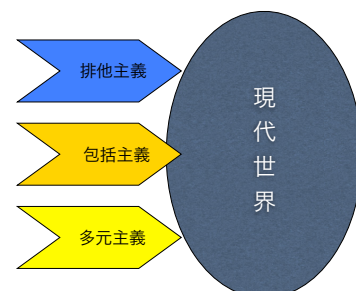
- 宗教的多元性は恒常的なものであり、それはいかなる単一の宗教にも取って代えられることはない。
- 諸宗教の中には固有の真理がある(ただし、すべての宗教が救済的意義を持っているわけではない)。
- いかなる宗教も、最終的・絶対的・普遍的な真理を保持していると言ふことはできない。
- キリスト教信仰にとってイエスは独特の意味を持っているが、その独自性は排他的な形で優越性・超越性と結びつけられるべきではない。

多元主義モデルの問題点

- 置換主義 (supersessionism)
- 例: ユダヤ教とキリスト教の関係
「古いイスラエル」と「新しいイスラエル」
「旧約聖書」と「新約聖書」



多元主義モデルの問題点



包括主義の再考

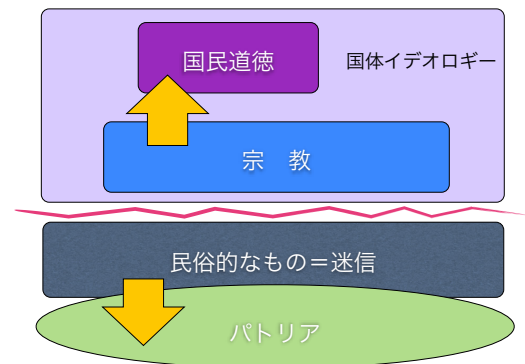
- 包括主義者は、他の宗教に対する肯定的な関心を持っている。
- 神仏習合とその近代的変容
 - 明治政府は神仏習合を否定し、神仏分離を実行。
 - 神仏習合の包括主義から国体イデオロギーの包括主義（神仏補完）へ
- イスラームにとっての「啓典の民」（ユダヤ教徒・キリスト教徒）

排他主義の再考

- 「ファンダメンタルなもの」の探求
- 西洋的近代への批判的応答として
 - 「原理主義を定義づける反近代の衝動は、したがって**プレモダン**ではなく**ポストモダン**のプロジェクトとして、よりよく理解されるだろう。**原理主義のポストモダン性**とは、何よりもヨーロッパ・アメリカによるヘゲモニーの武器としての**近代性を拒絶**するところにある——そしてこの点において、**イスラーム原理主義**はじっさいに範例的なケースである——ことが認識されなければならない」（ネグリ&ハート『帝国』2003年）。
- ナショナリズムへの抵抗の力としての正統主義者（排他主義者）

まとめ

- 信念を持ちながら、自らの立場を絶対視しないために
 - 「他者性」の認識、他者との「対話」
- 宗教の相互関係の類型論にとどまらず、宗教概念からこぼれ落ちてきたものに着目
 - 「民俗的なもの」
- 国家（＝「想像の共同体」）とパトリア（郷土）



まとめ

- アイデンティティ・ポリティクスの際に注意する
 - 文化的・宗教的アイデンティティを強調することによって、「異質な他者」をあぶりだそうとする傾向が強まっている（特にヨーロッパで）。
- アイデンティティの多様性に対する認識を深める必要性